

視覚障害児のサッカー導入の試みにおける発生運動学的研究

河先 眞弓¹⁾

I. はじめに

T盲学校小学部の体育授業におけるボール運動では、鈴入りボールを転がして行う種目を行って、これまではフロアバレーボール、グランドソフトボールを中心に取り組んできた。これらの種目ではボールを「捕る」「打つ」といった基本的技能を身につけることに重きが置かれるが、ルールを工夫しゲームへと発展させている。共通の基本技能とみなされる「捕る」は、正面から転がってくるボールに対してしゃがんで手を横に広げて構え、横に移動してボールを手当てるようにして抱え込んで「捕る」のである。

サッカーにはこれまでの種目にはない新たな動きかたが求められる。サッカー導入のきっかけとなったのは、児童と手をつなぎボールを蹴りながら運動場を一周し、その後に行った練習体験である。ドリブルを続けるには、ボールの方向を変えたり、止めたりできなくてはならず、そのためにボールを蹴ってそのボールの音を聞きながらボールの横を走り、追い越して回り込み、ボールを受けるといった練習を行った。ボールの動き（スピードや方向）を捉え、それに合わせて動くことが要求される。

盲児がボールを追いかければ衝突が起こってしまう。そのために、サッカーは危険とされ、体育授業でサッカーを取り上げている盲学校は少ない。また、晴眼者であれば誰でもできる、パス、シュート、ドリブルが視覚障害児には難しい。ボールを追って左右に蛇行しながら動いている児童の姿を時々見かける。聴覚の情報は視覚に比べると曖昧であり、しかもボールの音はよく聞き取れない小さい音である。ボールが少し離れれば音が聞こえなくなり、ボールが止まれば見失ってしまう。足から離れるとボールがわからなくなり、足がボールに触れているということがとても重要になる。ボールにどう触れたらいいのか、どう力を加えたらどうボールが動くのか、ボールに触れて、ボールと一緒に動いて、ボールを身体で見つけることから始めた。

本研究では、平成21年度に実施したサッカー授業において取り上げた練習教材とその手順をもとに、実践内容を分析し、サッカーが視覚障害児にどのような意味をもっているのか検討し、今後のサッカーの体育授業への定着、発展の可能性を探りたい。

II. 視覚障害児におけるサッカー導入の実践事例

平成21年度のサッカーの授業は、3年ほど前から取り組んできたことをもとに、1年生から6年生までそれぞれ約5時間実施した。学年の人数は2名から8名程度で学年によって異なり、児童や学年全体の状況に応じて補助の先生が入る。全盲から弱視まで視力や見え方は様々であり、知的障害、運動障害などを併せ持つ児童もおり、学年によって対応や工夫が異なる。

サッカーの授業において取り上げてきた練習教材を、A、B、C、Dの4つのグループに分けて考察した。初めて足でボールを扱い、ボールを追いかける経験をほとんどもたない視覚障害児に、なじみの地平（金子、2005a）を作るために用意した練習教材がAとBである。Aはボールに触れ、ボールと身体的位置関係を覚えていく基礎的な内容、Bは、Aをベースに、ボールの動きに合わせて動く発展的な内容とした。パス、シュート、ドリブルの基礎技能とされる練習教材をC、ゲーム形式の練習教材をDとした。

A 予備のための練習教材<第一段階・足でボールに触れる>

足裏、足の内側、つま先でボールに触れ、ボールの上、横から触れた。ボールが動かないように、またボールを動かすように触れた。

①ボール足乗せ（足裏タッチ）

ボールを上から足裏で押さえるのは、足でボールを確保する基本のかたちといえる。乗せた足を下ろし反対の足を乗せるようにして行った。初めは体重をかけ過ぎて転んだり、ボールが転がってしまったが、慣れてくるとリズムカルにタッチできた。

1) 筑波大学附属視覚特別支援学校 非常勤講師

②ボール足乗せ転がし

ボールに足を乗せたまま、前後左右、円を描くように、いろいろな方向へ足裏でボールを押し転がす。足裏でのボールコントロールは、身体からボールが離れず思うところにコントロールしやすいので、ブラインドサッカーには有効であり、横へ転がしながらステップして移動するなど、新たな練習教材へ発展させることができる。

③ボールはさみジャンプ

両足の間にボールをはさんでジャンプする。初めはツルンとボールが飛び出してしまったが、楽しみながら取り組み、連続してジャンプできるようになった。両足の間のボールの位置や足の内側（インサイド）でボールに触れる感覚は、ドリブルなどの技能の習得に必要である。

④ボール追いかけて転がし

先生と手をつないで、足で蹴ってボールを転がして追いかける。ボールの方向調整は先生が手引きして行った。追いついたらまたボールにつま先が当たり転がっていき、ボールがあちこちに転がってしまうが、児童は楽しそうに追いかけた。ほとんどの視覚障害児は、ボールを追いかけて動き回る体験が初めてである。

B 予備のための練習教材＜第2段階・ボールに合わせて動く＞

ボールを動かしたり止めたりしながら、ボールを追いかけて、追い越したり、回り込んだりして、ボールと一緒に動いた。ボールに対し横向きや正面向きで、前方や横方向へ移動した。

①ボール追い越し回り込みキャッチ

初めは、ボールを蹴った後いきなり違う方向に走り出したり、追い越せなかったり、遥か先まで追い越したりしたが、次第にボールとの程よい距離を保って行えるようになった。手でキャッチすることから始め、動きかたを覚えてから足で止めるようにした。音を聞いてボールの転がる方向やスピードを捉えなければならない。また、足を振り回してボールをさがしていた児童に、軽くボールに足を当て、少し動かし音を出して位置を捉えるといった動きが現れるようになった。

②3人ボール運び

3人で手をつなぎ、輪の中のボールを蹴って運び、ボールが輪の外に出ても追いかけて輪の中に入れ、目標地点まで移動させた。できるようになるまでに3人での協力や工夫が見られた。ボールが輪の中にあるよ

うにボールの位置に意識が向けられると、いろいろな方向、いろいろな身体の向きでの動きかたが現れた。

③2人移動パス

先生とのペアで行い、先生がボールを蹴りだし児童に追わせ、そして声をかけ先生の方向に蹴らせて、目標地点へ誘導する。空振りやほかの所に蹴ったりしながらも、積極的に蹴らせ、足でボールを見つけるようにさせた。児童が蹴ったボールを先生が追いかけることで、児童も自分の蹴ったボールの行方がわかる。ボールに身体を向けて横にステップしながらボールと一緒に移動する児童がおり、この動きかたはボールの動きを捉えやすい動きかたであることがわかった。

④横移動ボール転がし

足を横に振って、足の内側をボールに当て横方向に転がし、ボールと一緒に横ステップで移動し、反対の足を前に置き、足の内側にボールを当てて止める。同様に止めた足で蹴ってを繰り返す。ボールの動きに自分の動きを合わせることで、ボールの動きを先読みしてその先に足を出すことが要求される。ジーッと止まってボールの位置を見定め、身体全体でボールの気配を感じているような様子が見られた。

⑤1対1ボール奪い

先生が動きながらキープするボールを、児童は追いかけて蹴って奪う。まず、先生はボールに足を乗せ、動かして音を出し位置を知らせ、児童に蹴らせる。ただボールを追いかけるだけでなく、積極的に足を出してボールを蹴らないとボールを見つけることができない。ボールと人の動きに合わせて動き、人に触れたり、声から相手の向きや動きをとらえボールの位置を予測することが要求される。

C 基礎技能を身につける練習教材

A, Bの練習教材を行ってから、パス、シュート、ドリブルに入った。

①3角パス

パスを出す時は「いくよ」と言い、相手が「いいよ」と言い、位置を確認してから蹴った。友だちへ出すパスは、初めは強すぎたりよそへ蹴ったりしていたが、少しずつ相手にとり易いボールになっていった。足でボールを受けて止めるのは、しゃがんで手を広げて捕ることに比べるとはるかに難しいといえる。足を乗せて止めようとして転んだり、追いついても足の間を通り抜けたりしながらも、一生懸命ボールを追いかける様子が見られた。ある児童はボールに足を出して当てようとしたが、届かないとわかると素早く回り込

み、追いついたが足の間を通り抜けてしまい、もう一度回り込んだが同じようにトンネルし、最後はボールの上に足を乗せて止めた。試行錯誤しながら、コツやカンを働かせ、即座に反応していることがうかがえた。A、Bの予備的な動きの体験により、「できそうだ」「やってみよう」と動きの感じを呼び起こすことができるようになり、それが運動意欲として表れているのではないかと考えられる（金子ら、1996、p.44）。ボールを止めて向きを変えるのに、足を乗せて軸足でケンケンをする様子が見られた。初めは、パスを出す友だちの名前を呼んで声を聞いて向きを変えていたが、次第にだいたいの方向を捉えてから呼ぶようになった。3人の位置関係をイメージできているようであった。

②シュート

2つのコーンを3～4mの間をあけて置き、5m位離れた所からそのゴールを目指してシュートした。初めは空振りもたくさんあった。蹴った後、耳を傾けてボールの行方を追っている姿があった。ゴールしたかどうかは先生が知らせ、入ると大喜びし、ゴールに入れようと1回1回蹴りかたが変化していった。蹴った瞬間に「あっ」という声を上げた児童がおり、ボールが曲がったことがわかったようだ。また、大きな振りから力強い蹴りもみられ、気持ち良さそうであった。児童たちは、成功したかどうかだけでなく、運動感（フェッツ、1979、p.234）を楽しみ、満足感を得ていると感じられた。さらに、ゴールを狙えるようになったことで、運動感として感じると快感も強まり、意欲的に取り組めたのではないかと考えられる（金子ら、1996、p.46）。また、ドリブルやパスなどと組み合わせ、「シュート」というかけ声で蹴ることができ、ゴールの位置がイメージされているようであった。

③インサイドドリブル（足の間ボールを置き、インサイドで交互にボールタッチ）

ブラインドサッカーにおいて基本となるドリブルが、足の間でインサイドで交互にボールタッチするやり方である。ボールを前に蹴りだすドリブルは、相手にボールを奪われやすく、自分でもボールを見失いやすい。足に当たる位置やボールの動きを確認しながら、ゆっくり歩いて行った。次第に速いリズムで行う児童もでてきた。

D ゲーム形式の練習教材

敵味方が混ざり合って、攻防するゲームを、安全に体験させることが一番の目標であり、どのような形で

の実現が可能か試された。基本的に盲児と先生がペアになり手をつないで動き、盲児も弱視児も一緒に行った。それぞれのゴールにボールが入れば得点になり、特別なルールはほとんど設けず行った。運動空間を動きながらゴールの位置を把握することが求められる。盲児の参加のしかたはいろいろであるが、初めは先生に手を引っ張られて動いていた児童も、しだいに自分から蹴りにいく様子が見られた。ボールの音をめがけて敵味方なく集って、蹴り合ったり、ボールをもっていると何本もの足が伸びてきたりした。弱視の児童の闘志あふれるプレーには驚かされた。弱視児同士の衝突を考慮しチームを編成したが、何よりゲーム中の先生方の動き、声かけが重要であった。今後は、ボールの扱いの上達とともにピッチ内での動き方を身につけ、さらに、1対1の人と関わりあう練習により身体能力を高めることが、より安全なゲームにつながるのではないかと考える。

Ⅲ. まとめ

足でボールを操作するサッカーにおいて、足でボールに触れて感じる能力、ボールの動きを感じ、自分の動きを融合させる能力が向上した。日常生活において足裏で地面の形状や環境を把握する視覚障害者にとって、足でボールを操作しその先に伸びる伸長能力（金子、2005b、p.45）を養うことは大変重要である。また、空間の広がりに関する情報の入手が不自由である視覚障害者にとって、始原身体知である定位感・遠近感・気配感能力（金子、2005b、pp.2-9）の向上は大変重要である。これらの点においてもサッカーを視覚障害児に行わせる意味があると考えられる。

そして、初めに、予備のための練習教材により感覚を養うことで、パス、シュート、ドリブルの基礎技能の練習をスムーズに行なうことができたと考えられた。予備的な練習の「足でボールに触れる」、「ボールと一緒に動く」という経験のなかで、身体全体でボールの気配を感じボールを見つけ出している姿が見られた。パス、シュートの練習においては、コツやカンを働かせ試行錯誤し、また、運動感を楽しみながら、意欲的に取り組むことができた。

さらに、これらの経験で得られた基礎技能を用い、やり方を工夫し、ゲームを楽しむことができた。自由に走り回ることができない視覚障害児にとって、ボールと人の動きを感じ、人が混ざり合って動く体験から得られる身体能力の向上は、大変意味があると考えら

れる。何より、ボールを追い、敵味方入り混ざって、広い空間を縦横無尽に動き回るサッカーは、視覚障害児にとってとても魅力的であると思われた。

文 献

- フェッツ：金子明友・朝岡正雄訳（1979）体育運動学，不味堂出版：東京，p.234.
- 金子明友監：吉田茂・三木四郎編（1996）教師のための運動学，大修館書店：東京，pp.44-46.
- 金子明友（2005a）身体知の形成上，明和出版：東京，p.199.
- 金子明友（2005b）身体知の形成下，明和出版：東京，pp.2-9, p.45.